江島屋という古着屋の商品である婚礼衣装そのものと、それを承知の上で商売している経営者の両方を指している。この頃はまだ消費者庁も消費者センターもない時代なので、こういう確信犯的な犯罪は多かったに違いない。しかし商業が発展した江戸時代である。当初から井原西鶴は、タコの足を切って売り、あるいは使用済みの茶葉を売るなどの詐欺をした商人が、最後は狂い死ぬ話を書いた。商いとは信頼こそが価値だ、と発信し続けたのである。今も全く同じである。騙された消費者の恨みは深い。

●小咄と落語（駒長）

一七六八年（明和五）刊の噺本『軽口はるの山』に「筒もたせ」という小咄が収録されている。金に困って友達に相談すると、かみさんの器量が良いのだから若い者に色ごとを仕掛けさせ、お前は戸棚に隠れてそれ見つければ三百目にはなるよ、と言う。その通りにしたのだが、戸棚の中から出た途端に、「筒もたせみいつけた！」と言った、という話だ。無論計画はおじゃんだ。小咄が落語になる例は多いが、こんな話がこの複雑な落語にまで成長するには、長い曲折を経たであろう。登場人物は『大岡政談』の登場人物の名前を使ったので、実際に世間で起きている事件をさまざま参考にしたと思われる。そこから、女性がしたたかに生きる強さと悪知恵を作り出したのだろう。落語の話は社会の実像を反映しているからこそ、笑ったり怖がったりできるのである。

●江戸の大工（大工調べ）

江戸では、幕府の建設工事は作事奉行が受け持っていた。作事奉行の指示によって、その下の大工頭（代々世襲）が工事全体を統括した。同様に、大工頭の下の大棟梁（代々世襲）が設計面の管理や職人などの手配などを担当し、住んでいる地域の大工組に所属している大工・職人を動かした。各大工組は規約をつくり、親方が統括して所属する大工から経費を徴収していた。この噺に登場する頭の政五郎は、親方の下に位置していたと思われる。前半に出てくる政五郎の「番町での長丁場の仕事だから」の台詞は一つの大工組だけではなく、大掛かりな幕府の建設工事を意味する。幕府は江戸城の西側の防御を固めるために、大番組と呼ばれる旗本たちを住まわせた。番町（一番町から六番町）はまさに江戸城の西側にあるので、この界隈の武家屋敷の建設工事だったのではないかと推測できる。

次回予告

第 672 回 よみうり大手町ホールにて。

6月25日〈火〉よる6時開場／6時30分開演

辰巳の辻占 ◉ 春風亭一花
片棒 ◉ 三遊亭笑遊
藁人形 ◉ 林家正蔵
強情灸 ◉ 柳家喬太郎
山崎屋 ◉ 桃月庵白酒

公演予定　7月29日〈月〉/8月17日〈土〉午後5時30分開演/9月5日〈木〉

▣ 当世噺家気質　その255・柳家蝠丸と「江島屋怪談・恨みの振袖」

病み上がりかと疑うような痩せぎすの体で、ふわりふわりと高座に上がる。体重は40キロ台を上回ったことがないらしい。白髪混じりの髪、げっそりとほおが痩け、目だけがキラキラ光っている――。怪談の登場人物ではない。これが柳家蝠丸の、ごく普通の高座姿なのである。

蝠丸は若い頃から怪談が好きだった。かつて、彼が所属する落語芸術協会に春風亭扇枝（1952～2002年）というベテランがいた。あの桂歌丸が三遊亭圓朝作の怪談噺を手がけるよりずっと以前から圓朝ものに取り組み、毎月、自分の会でネタおろしをしていた。若き日の蝠丸（二ツ目当時は小蝠）はこの会に興味を持ち、扇枝もそんな蝠丸を可愛がった。

蝠丸が真打になるかならないかの頃というから1980年代の後半か、扇枝から「噺を教えてやるから来い」と呼び出された。

「これが、とんでもない稽古なんですよ。『江島屋怪談』と『もう半分』と『一眼国』という、怪談３席ぶっ続け。ありがたいには違いないけど、何がどの噺やら、頭がくらくらしたことだけ覚えています」

それでも真打直後、四谷倶楽部で始めた独演会の記念すべき一回目で『江島屋怪談』をなんとか初演した。だが、寄席で演じるには長すぎるし、年中できるネタでもない。

「教わったものの手をつけられない状態が続きました。これじゃいけないと、『江島屋怪談』を得意にした五代目古今亭今輔師匠の音源を聴いたり、圓朝全集を読んだりして、自分なりにまとめてみたんです」

そんな研究成果が実を結んだのが、2016年から6年続いた浅草演芸ホールの「怪談ばなしの会」だ。10日間興行の最初の5日が蝠丸、後半5日は講談の人間国宝・神田松鯉のトリでを怪談を演じるという企画である。照明などの効果を駆使し、ユータ（落語家が扮する幽霊）を出すなど工夫を凝らした怪談が好評だったが、２019年にアクシデントがあった。

「怪談の最後、照明を真っ暗にして、早変わりで幽霊になった私が『ひひひ』と言いながら舞台袖に引っ込む段取りなんですが、何を間違ったか、客席の方に後ずさって高座から転落、骨盤骨折という大怪我をしました。本当は即手術なんですが『あなたは痩せすぎて体力がないからできません』と先生に言われて、結局３か月寄席を休みました」

さて恐ろしき、なんとやら――。こんなことがあっても、蝠丸は挫けずに怪談を続けている。

「たいていの怪談ものは後半に幽霊が出る。でも『江島屋』は最初から只事ではない雰囲気で、全編、異様なムードが漂っています。私は『牡丹燈籠』のようなきれいな怪談より『江島屋』のようなおどろおどろしいのが大好きで」

やはり怪談は蝠丸のライフワークなのか。

「いやいや、皆さん誤解されてるようですが、私は『怪談しかやらない』ではなく、『怪談もできる噺家』ですから。滑稽噺も好きですよ！」

（長井好弘）

第六百七十一回 落語研究会

日時●令和六年五月二十一日〈火〉よる六時開演

会場●日本橋劇場（中央区立日本橋公会堂）

主催●TBSテレビ

《演目》

両泥●雷門音助

そば清●柳家さん喬

江島屋怪談
恨みの振袖●柳家蝙丸

《仲入》

駒長●五街道雲助

大工調べ●柳家三三

三味線 太田園子　松尾あさ子
笛 春風亭一花
太鼓 柳亭市童
前座 柳亭市遼

新・落語掌事典（二五一）

田中優子

●泥（両泥）

「泥棒」の語源を調べると「押収坊（おしとりぼう）」など多くの推測に出会うものの、はっきりしない。この言葉は江戸時代から使われたと言われている。それ以前は、中国で盗賊を意味した白波賊から「白波（しらなみ）」と呼んでいたようだ。物を盗み取る行為全般を指しているので、盗人の総称と言えるだろう。この噺に登場する二人の泥棒は空き巣である。空き巣は留守中の家に侵入し、誰とも接触せずにその家の財産を盗む者またはその行為だ。首尾よく誰にも見つからないことが条件だが、もしも現場を見つかってしまったら、傷害や殺人に至るだろう。その場合は呼び名も強盗に変化する。江戸時代では戸締りが疎かだった場合の減刑はあったようだが、土蔵などの錠を破ったら、窃盗でも死罪となった。盗みは、全ての犯罪への入り口だったからだ。

●大食い（そば清）

古くから「～比べ」と称して競い合い、それを周囲が面白がる風潮があった。特に江戸庶民は力士や長者の番付を好み、本も出版され人気を博した。そこで大食の番付もできた。暴飲暴食を奨励する医者はいない。消化器系の異常を招き病に繋がるからだが、幕臣であった宮崎成身の『視聴草（みききぐさ）』には、一八一七年（文化十四）に柳橋の茶屋「万八楼」で開催された大酒大食会の様子が榊原文翠の絵で残されている。飯連、鰻組、そば組、酒組等各組の高成績者と飲食量等も記録された。そば組ではこの噺の七〇杯に届かないが、池之端仲町の山口屋吉兵衛の六三盃がトップだった。飢饉が珍しくない時代だ。たらふく食べることが豊かさ、という価値観がまだまだ根付いていたのだろう。しかし、膨大なフードロスを引き起こしながら食糧危機が近づく現代では、厳に慎みたい。

●イカモノ（江島屋怪談・恨みの振袖）

この噺は怪談噺全十五席『鏡ヶ池操松影』の中の「江島屋騒動」である。一八六九年（明治二）に三遊亭圓朝が創作した。イカモノは「如何物」と表記する。まがい物、偽物、イカサマ物のことだ。転じて、イカサマ師、詐欺師、ペテン師とも解釈される。この噺のイカモノは、

（裏面へつづく）